

第3章

新しい選挙制度の時代

小泉純一郎——雄叫びを上げたライオン

原発事故で目覚めた「元総理」

平成17年9月の郵政選挙で自民党は296議席を獲得して圧勝したため、小泉純一郎首相が望めば特例によって総裁任期の延長は十分に可能であった。昭和61年に衆参同日選挙で自民党を大勝に導いた中曽根康弘が、特例で総裁任期を1年間延長された例がある。在任期間

が4年半を過ぎても人気は衰えず、支持率も依然として高水準であった小泉の続投を求める声は自民党内に強かった。

だが、小泉は当初の予定通り、翌年9月に退陣した。小泉が実質的に政界の檜舞台に立たせた安倍晋三が後継首相になったにもかかわらず、小泉は首相を退任すると公の場でほとんど発言をしなくなったし、みずからの影響力を微塵も残そうとはしなかった。平成19年に安倍が辞意を表明した際にも、小泉の再登板を求める声が上がったが、小泉は一蹴した。

麻生内閣が発足すると、小泉は「国会議員としての能力は使い果たした」「国会議員を36年間やり、役割は済んだ」と政界からの引退を表明した。67歳での突然の引退表明に惜しむ声が上がった一方、その潔さに多くの国民は拍手を送った。5年半の首相在任で疲れ果て、自由な生活を求めたのかもしれないが、かつて中曽根康弘や宮沢喜一を政界引退に追い込んだのと同じ物差しを、小泉は自分自身にも当てたと見える。

小泉は引退表明の際、次男・進次郎を後継者に指名したため、野党は「奇人でも変人でもなく、普通の親」と批判した。だが、小泉は「親バカといわれるが、これで私が普通の人、普通の親だとわかったでしょう」と開き直った。さらに「私が初めて立候補したときより、しっかりしている」と進次郎を持ち上げたが、小泉の言葉が嘘でなかったことは、その後の進次郎の行動や発言からも明らかである。

首相を退任し、さらに政界から引退すると、小泉は時おり講演をしたり、応援演説をした。りすることはあっても、マスコミの前にほとんど姿を見せなくなった。もっぱらオペラや歌舞伎、音楽、ゴルフを楽しみ、政界から距離を置いた点においても、小泉はそれまでの前首相・元首相の第二の人生とは大きく異なった。政界引退後に久しぶりに一部のマスコミに登場したのは、歌舞伎俳優の市川老蔵の結婚披露宴で挨拶をしたときや映画『ウルトラマン』の中で声優を演じたときくらいで、男やもめの「老後」を満喫していた。

首相在任中もそうであったが、小泉の生き方にはメリハリがあり、オンとオフがはっきりしている。歴代の首相や政治家の多くが引退を句点ではなく読点としてきたのに対し、小泉の退陣や引退は紛れもない句点であった。だからこそ、後継の首相や政界の後輩たちに口出しをしてこなかった。小泉自身、首相在任中、先輩議員からの無用な口出しや介入を嫌ったが、その点でも小泉は自分を例外扱いしなかった。

しかし、東日本大震災を機に小泉の第二の人生は大きな変化を遂げた。福島第一原発の事故を受け、「国民は原発が安全だとは信用しなくなった」と強烈な脱原発論者に転じ、その運動をライフワークにしたのである。小泉の動きに対し、何か別の思惑があるのではないかとはいった邪推もあったが、小泉は原発を推進してきたことを反省し、北欧諸国の例なども参考にしつつ、純粹に日本のエネルギー政策を改めようとしているにすぎない。

小泉は平成25年11月の日本記者クラブでの講演で、「総理が決断すれば、原発ゼロは必ず実現する」と安倍首相の決断を促し、初めて時の政権に公然と注文をつけた。のみならず、後に「どこかの人が福島はコントロールされていると言っているが、呆れちゃいますね」と暗に安倍首相を批判した。

小泉の脱原発運動は発言だけにとどまらなかった。平成26年1月には細川護熙元首相と脱原発でタッグを組み、東京都知事選挙で細川を応援したのである。久しぶりに街宣車に上り、拳を振り上げて演説する姿は多くの聴衆を魅了した。細川が当選することはなかったが、2人の元首相による脱原発の狼煙は大きな話題となった。

都知事選挙の後も、小泉は細川と自然エネルギー推進会議を設立し、脱原発を押し進めている。公の場所に姿を現すことは少ないが、それでも講演で「自民党は選挙で言ったことを忘れたのか」「日本の原発は環境汚染産業だ」などと訴え、政権や政府関係者をハラハラさせている。73歳になっても「小泉節」は健在であるし、小泉が晩節のライフワークを諦める兆しは一向に見られない。